

「自是自私(じぜじし)」に陥らぬために

人の一生の大(だい)なる罪過(ざいか)は、只(た)だ「自是自私(じぜじし)」の四字に在り。

呂 新吾

今月のブログは、「菜根譚」と並ぶ中国における処世訓の名著「呻吟語(しんぎんご)」からのご紹介になります。著者の呂新吾ですが、新吾は号の名で、本名は呂坤(りょこん)、字(あざな)は叔簡(しゅくかん)といいます。中国明代の末期に官僚として活躍しましたが、皇帝への上奏文が、反対派の誹謗中傷に遭い、そのことを契機に官界から身を引いたとされています。ちなみに、「呻吟」とは、「もともと病人が発するうめき声の意」(湯浅邦弘著「呻吟語」角川ソフィア文庫より)とのことです。明代の末期は大変な混乱期にあり、官僚としてひとかたならぬ苦難を経験したであろう筆者が、その経験を通して紡ぎだした言葉の数々が、この呻吟語であり、また、それらは、時空を超えて、辛く厳しい状況にある人々への応援のメッセージでもあるような気がします。

前置きが長くなりましたが、冒頭の箴言の大意は、「人の一生の最大の過ちは、「自是自私(じぜじし)」(自ら是とし自ら私(わたくし)する)(自分だけが正しいとし、自分だけを擁護する)という四字につきる。」となります。(同書)

一般的に、仕事を通して知識、経験を積むと、仕事に対する自分なりの考えや自信などが形成されるわけですが、その反面で自分の考えや仕事のやり方等にあまりにもとらわれてしまうと、ここでいう「自是自私」に陥るおそれがあります。組織の一員としては、常に人の意見に耳を傾け、自省を心がけていくことが求められているのではないでしょうか。

また、以前から申し上げているように、現代は変化の激しい時代であり、生成 AI の進展などにより、これからの社会や経済は今までに経験したことのないような大きな変動を迎えるものと思われます。そのような時代状況の中、我々は、「自是自私」に陥る可能性が従来にも増して高まっているのではないかと思います。

ちなみに、呻吟語には、「忍激の二字は、これ禍福の関(かん)なり」という箴言もあります。大意は、「じつと堪(た)えて忍耐、辛抱するか、一時の感情にかられて激高(げきこう)するか、そのどちらをとるかが禍(わざわい)や不幸と幸福との境、分かれ目になる」(守屋洋編・訳「呻吟語」徳間書店より)ということです。

例えば、人間には、元々自己保存(防御)本能があり、どのような形であれ他者からの攻撃と受け止めれば、その防御機制の一つとして、「怒り」の感情が表出するのではないかと思います。仮に、「自是自私」の状態にあるようなときに、他者から自己の意見等を否定されたときは、より一層「怒り」の感情が高まるのではないかと考えられます。

最後に、誤解のないよう念の為申し上げますが、職場で自己の意見を主張し、議論等を行うことは、組織の活性化や職員同士の相互理解などにとって大切なことです。ここで組織の一員として注意しなければいけないことは、自己の意見にあくまでも固執することであり、過度に感情的になることです。自戒の念も込め、こうした事態を惹き起こさないような、しなやかで穏健な心性を日頃から養いたいものです。

(敬称略)

令和6(2024)年2月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明